

寄り添い守るを生涯続ける



<16>

寄稿 橋本 秀浩

(佐藤渡辺取締役常務
執行役員工事本部長)

私は東北支店工事部長として、2014年から4年間、三陸沿岸道路(宮城県南三陸町など)の新設舗装工事に携わりました。

岩手県大船渡市内にあった当社の営業所も津波で被災し、多くの関係者やご家族が犠牲となりました。「公共施設や道路が立派に再建されても、被災された方々の心の傷が癒えることはない」。その痛切な思いを胸に、私たちは復興事業に向き合

ってきました。道をつくるだけで人の心まで癒やすことはできませんが、それでも私たちは道を通じて、この地域とつながり続けたいと考えています。

当時を振り返り、特に心に残っているのは、南三陸町の少し奥まった場所にあった1軒の食堂です。震災直後から多くのボランティアを受け入れ、地域に尽力された女将(おかみ)さんが切り盛りされていました。女将さんが語ってくださる震災時の光景は、どれも壮絶で胸を締め付けられるものばかりでした。想像を絶する苦しみに触れるたび、私自身も深い悲しみに包まれたことを覚えています。

ある冬の寒い日、町営魚市場の復興イベントに職員と出向くと、そこ



志津川湾の夕日

には「はっと汗」の屋台を出す女将さんの姿がありました。私たちに気付いた女将さんは「常連さん！」と声を掛け、熱い一杯を振る舞ってくださいました。凍えるような海風の中で味わったその味は、冷え切った体だけでなく、私たちの心まで温めてくれました。それは、女将さんが私たち工事関係者を「共に復興を目指す仲間」として認めてくださった、絆を感じた瞬間でもありました。あの時の感動と喜びは、今も鮮明に胸に残っています。

震災から15年の月日がたちました。被災された方々の思いを忘れないうち、私は毎年11月、妻とともに千葉の自宅から南三陸町を訪れています。自ら施工に携わった三陸沿岸道路を走る際、職業柄つい路面状況を確認し

「走行性よし」と口にしている自分がいまです。同時に、厳しい寒さや資材不足の中で現場を

完遂させた当時の職員たちの苦労がよみがえり、自然と熱いものがこみ上げてくることもあります。

道中、地域貢献に尽力された志津川湾沿いのホテルに宿泊し、美しい景色と海の幸を堪能するのが毎年の楽しみです。翌日は、少しでも経済的な力になればと地元のお店で買い物をし、帰路に就きます。しかし、年々観光客が減っているように感じられるのが、現在の気がかりです。

この15年で、被災地の復興は目に見えて進みました。今後は建設された公共インフラの維持・更新も重要な局面を迎えます。現在、私は本社で全社を統括する立場にありますが、東北に強いネットワークを持つ建設会社として、被災者の方々の思いに寄り添い、地域を守り続けていくことが当社の使命であると確信しています。この決意は、私自身の生涯のライフワークです。

東日本大震災から力強く立ち上がり、未来へ進む東北の皆さまは、真に強靱な心を持っておられます。私はこれからも、何年たとうとも東北へ向けて「がんばろう東北」というエールを、声を大にして送り続けてまいります。

